狂言

昭和52年1月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7－5
井上松次郎方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481) 4745

狂言人語

あけましておめでとうございます。昭和三十一年十二月に創刊した本紙も丁度満二十才を数えたことになります年九回発行という本紙、このまゝ続ければ、やがて来年中には二百号に達する仲で時代の大きな転換期を迎えております。値上げの相次ぐ中で景気の動向が気がかりです。さらには東海大地震の予測にも不安がかくせないものですが、ともあれ新しい昭和五十二年のスタートです。今年もどうか、平和でよい年になりますよう。

謹賀新年

昭和五十二年元旦

狂言共同社

るわけです。物価高の折柄、印刷費、郵送費の値上りに悩まされ、また繁忙さの中で同人のお荷物扱いされ、しばしば月遅れの発行という事態を繰り返しながらも、なんとか続けて参りました。同じ頃に生まれた子供が早くもこの十五日には成人式を迎えるはず。感慨深い思いがします。あいも変わらぬ小紙ですが、今年も皆様のお手許にお届けします。

総選挙の結果、政局地図も大きく塗り変えられ、新内閣の発足、与野党伯

一月の催能

一月七日　学生能
能　竹生島
狂　清経
狂　花月
能　羽衣

一月九日　青陽会
能　吉野天人　生駒美代子　飯富雅介
間　佐藤友彦
能　俊寛　殿島修二　高安滋郎
間　井上松次郎

能　小鍛冶　近藤幸江　高安勝久
間　大野弘之
狂　雁大名　井上礼之助　佐藤秀雄　井上松次郎

一月十五日　清韻会
能　砧　小島トミル　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　昆布売　井上礼之助　佐藤友彦

一月十六日　紳士能
能　枕慈童　鬼頭京子　西村欽也
能　羽衣　佐瀬郁子　高安滋郎
狂　舟ふな　佐藤友彦　大野弘之

一月二十三日　武田謡楽会

狂言解説

雁大名＝訴訟で永らく在京の大名。此度訴訟に勝って晴れて帰国することとなり、世話になった人々を招いて一席設けることにしました。肴を求めに肴屋町へ太郎が使いに行きますが、永の在京で金を使い果したこと故、肴屋も売ってはくれません。そこで大名と冠者は一芝居打つことにしました…。

昆布売＝自身太刀を持って出た大名通りかかった昆布売を無理矢理太刀持に仕立てて従わせますが、おさまらないのは昆布売の方です。遂に持たされた太刀を抜き振り上げ、遂に大名を威して昆布を売らせることになります。

舟ふな＝西の宮へ遊山に出た主従。途中の神崎の渡しで、太郎冠者は対岸の船を呼ぶとて「ふなヤーイ」と呼ばわります。主人があれは「ふね」じゃと云っても聞き入れません。主従の間にまた「ふねふな」論争が始ります。

狂言紅白

野村広二

あけましておめでとうございます。新しい年を迎えた能界が多幸でありますよう、皆様とともに祈りたいと思います。

昭和五十一年をふり返えると、昨年も大層目まぐるしい歩みに終始しました。老女物、祝賀・追善の能・狂言の会、芸術祭能、叙勲と受賞、能・狂言の本、活潑な啓蒙運動や海外能など話題は豊富。なかでも近藤乾三氏の芸術院入り、茂山千作翁の人間国宝指定全国各地の演能の幅の広さ、国立能楽堂設立の大きな運動は活目に価するが徳川義親氏はじめ、北岸佑吉氏、諸大家、能・狂言に一生を捧げられた方々を多く物故者に数えねばならなかったことは痛くわが胸を打つ演能のことは能楽タイムズを毎号手にして、表の大きな見出し同様、裏の頁の、それも一頁に余る演能紹介欄・今月の能が目を楽しませる。東西のパンフレット「能」（水道橋能楽堂・京都観世会館）伝統芸能（伝統芸能懇話会）もありがたい。それにしても何と演能の多いことか。これをこなす能界はまことに積極かつ貪欲といわねばなるまい。こうして、北海道から沖縄、東奔西走の各主催者・演者の意欲と戦後三十年ここま

で到達した努力の結集、豊かな心の開花が、時代の流れ、新旧の交代・最新の流行のなかで、十分に得られることを信じたい。それが雨露の慈みであるように。しかし、中央と地方のよき相互理解にもとづくことは言うまでもないが、目下の急務として能界が抱える三役の充実・養成の問題にいよいよ拍車をかけることにもなろう。苦楽が交差する。次に茂山千作翁が、昨年の傘の祝につづき、人間国宝になられたことはまことに朗報であった。万蔵の豪放と陰影、藤九郎の柔かさと明暗にひきかえ、どこまでも明るい芸の持主である。そして万蔵・千作・藤九郎三長老が昨年も元気な舞台で狂言のよさを示されたことが何よりうれしい。名取川（万蔵、名古屋・人間国宝の会・朝日と名古屋和泉会）千鳥（千作、NHK放送は以下おなじ）おなじく千鳥（藤九郎、名古屋和泉会）にそれぞれ狂言の妙を展開したことはその一端と言えよう。また藤九郎氏は比丘貞を演ずる同氏はたしかこれで能で言う三老女を勤めたことになる。自作の狂言も舞台にのせて狂言の世界を広げた。なお山本三兄弟が楽阿弥（東次郎）花子（則直）釣狐（則俊）を初演また披いたことも特記したい。

芸術祭優秀賞には本田光洋（金春流三井寺）萩大名（保之ほか）と遊行柳（大槻秀夫ほか）の出演者一同の諸氏に年末決った。めでたい。

能の特記は割愛し、先に進んで放送のこと。放送は能十三番狂言八番前後をみる。どれも事新しく記憶によみがえる放送ばかりでした。鵜（巌、佳）の神戸観世能楽堂（元東京観世能楽堂）はなつかしく、仕舞（英雄・清経）の上演もよい企画でした。本は、能をたのしむ（増田正造）狂言をたのしむ（小林責）を大変おもしろく読んだ。モダンで含蓄ある文章は劃期的。一昨年の「能のみかた」（権藤芳一）もよい。能（野上豊一郎）能楽入門（三宅襄）能の世界・狂言の世界（古川久）能、狂言（保育社カラーブックス、丸岡明・吉越立雄、羽田昶・同）の時代をへて、ようやくここまで到り得たことを喜びたい。そして表紙がぼろぼろになった野上さんの本を前に、諸家の高山広河をなす研究と観能の絵巻を回顧、あらためて諸業績に敬意を表せずにはいられなかった。大著狂言の装束（切畑健、紫紅社）もでた。先代野村又三郎のこと（近代の狂言師たち、小林責、能楽タイムズ、六回）は力篇。能楽資料集成（法大能楽研究所篇）の配本は六巻を重ねる（十一月）。故高木市之助博士の全集第四巻（十一月）に平曲二篇能の文章が七つ。「伊勢物語と杜若」ほか（講談社、全十巻）。なお金剛第九十七号（五一・十月）能の周辺欄で今は亡き北岸佑吉氏の「薪能の在り方」（五月執筆）をなつかしく拝読。出版界も多様であった。レコードの頒布もさかん。丹波篠山市に能楽資料館ができたことや「翁」の切手（一四〇円）発行のことも忘れてはならない。

さて昨年の名古屋は。変らぬようで変り、古風で新しい名古屋の五十一年であった。定着と変化が昨年もありました。それはゆるやかな充実をみせた一つの山を登りつめたと言えよう。さらに次の山に向ってはげしい意欲を望みたい。そして東西のシテ方（五流）狂言方の来名は美しい花をみせ、狂言の世界に没入させ、他方在名三役の東西出勤は能・狂言につながる自己の目を広く開かせる機縁となったでありましょう。能は二十五番ほど狂言は十番余り。佳き能の三・四は胡蝶（元正）山姥・雪月花之舞（博太郎）綾鼓（大坪十喜雄）殺生石・玉藻前（巌）。それに一調一管・江口（六郎兵衛・喜之）嚏子恋重荷（寿夫）同野宮（静夫）小舞福部の神（弥太郎）は佳作だったし、盛義、本田光洋、豊嶋訓三・三千春兄弟、長田驍諸氏の活躍も注目したい。地元ワキの高安勝久氏の進歩もあげておきたい。狂言は佐藤卯三郎氏追善の名古屋和泉会・朝日狂言会・やるまい会など五つの会（六回）は狂言の味をたんのうさせたが、共同社は五十五番ほど勤めたろうか。長老佐藤氏亡き後も堅実に進み、三番叟（松）ほか、野老（ところ、又・松）蝸牛（松・礼・秀）武悪（松・礼・秀）に友彦・弘之両氏の寝音曲は名古屋のよさをみせ、特に印象に残る。靱猿（サル野村信行・井上功元）も二回。また毎年の諸行事が名古屋シテ方五流参加で盛会に催されたことは格別特記したい。人間国宝の会・藤田追善能・柴田初太郎米寿祝賀能も盛大。愛好者の演能・学生能も熱心。能・狂言を直視する好機会である青少年対象の会もおなじ。そして桃山文化展・東山御物（ごもつ）展は能・狂言にとっても大切な催しであった。

年末の放送は松風（後藤得三）俊寛（寿夫）千鳥（千作）をみ、思い出の芸と人・弥五郎と先代東次郎（話小山弘志・弥太郎）鉢木（桜間道雄）砧（高橋進）をきく。どれも佳かった。

本は能のデザイン（増田正造、平凡社カラー選書）能謡襍談（名古屋那古野神社舞台のこと、藤浦富太郎、観世五一・十一月）明春アメリカで能装束展（徳川美術館所蔵、同十二月号と毎日十一・五）。ほかに郷土と桃山文化（桃山文化展、徳川義宣、朝日五一・十・二〇）桃山文化展を観て（笠原幸雄同十・二三）東山御物と雑華宝印（奥田直栄）なおしげ〈中日十・二七）清経（秋の思い出、網野菊、朝日十・十三短歌俳句欄）古典芸能の衰退（安田武、東京十・八、万蔵のこと）能舞台の精霊たち（長尾一雄、ちくま八月号）小川国夫・天の花淵の声（大岡信、八月文芸時評、朝日）を付記。

付。五一、九月号北岸佑吉氏追悼文中「多彩の花を咲かせました。古風そのものと云々」の句点を欠き、享年が亨年に、十月号NHK以下おなじがおなじみになっていました。お詫びして訂正します。

新作狂言

御用の尼

作・佐藤友彦

シテ・住　持
アド・御用の尼

シテ／当庵の住持でござる。今日もまた勤めを致さうと存ずる。（脇座に座シ鐘叩き経ヲ取り出シテ誦経ヲ始メル）南無妙法蓮華経、ムニャラ／／ムニャラ／／／／／／

アド／（袋ヲ頭ニノセ幕カラ出ル）御用承らう、御用承らう、御用承らう何なりとも御用承らう。（シテ柱先ニテ止マリ）申し、申し、御坊様。何にても御用承りませうぞ。

シテ／（チラト目ヲヤルガマタ誦経）ムニャラ／／／／／／

アド（正中マデ出テ座シ、袋カラ中味ヲ出シ始メル）古衣、頭布。ほれ、この様な結構な袈裟もござりますぞ。これを召さるれば、お布施の入りも随分多うなりましょうぞ。おゝ、それそれ、御酒もありまするわ。（勝手ニツイデ呑ム）ホイ。

シテ／（経を止メテ）これ。今は大事の勤めの最中でござるぞ。見ればそなたも御仏に仕える身の様じゃが、その様なあさましいなりはせぬものじゃ

アド／妾は別にあさましい者ではござらぬ。上下を問わず方々へ出入りをし、入用の物を用立てる。それ故御用の尼と呼ばれ、いずれからも調法がられる者でおりある。

シテ／ハ、いずれ御仏の教えもお忘れあったそうな。（経を取り上ゲ）ムニャラ／／／／／／

アド／（酒ヲツギ呑ム）ホイ、御坊様も一つ上がりませぬか

シテ／愚僧は酒は呑まぬ。ムニャラ／／ムニャラ／／

アド（周囲ヲ見廻シ）扨も／／むさい庵じゃ。坊主むさけりゃ庵もむさしおゝそれ／／、よい物がある。鏡じゃこれ、これを求めさせられ。

シテ／これ、尼殿。その様な商いというものは自然罪障を作りたがる物じゃ。商いの為には畢竟人をだまさねばならぬ。安い物を高う売り、粗末な品を結構に見せかけ、いらぬ品を上手に云うて売りつける。仮りにも尼の身として商いに身をおくと云事があるものか。

アド／これば異な事をお云ひある。妾は御用の尼でござるぞ。衆生の用をたすものなれば、方円にあふるゝ水をばうけとめ、足らざる器に満たすが如く、不用の物を引き取り、入用の物を整える。されば自然の理に叶うたものではござらぬか。

シテ／笑、その足らざるを満たすと云うが問題じゃ。お知りある通り人にはそれぞれ煩悩がある。この煩悩には限りがない。足らざるを満たすなどと云うは火に油を注ぐ様な物じゃ。これここが大事でござるぞ。足りぬは煩悩を絶ちさえすれば足るも足りぬもない愚僧はこのむさい庵で充分でおりある南無妙法蓮華経ムニャラ／／／／／／

アド／ハア、すれば妾は無用の尼そうなさらば去にまする。（ト立チカケテマタ座リナオス）おゝ、それ／／肝心な用を忘れるところであった。申し、申し御坊様。

シテ／エイ、まだそれにおりゃるか

アド／今日はこのむさい庵に花を届けに参ったことでおりゃる。

シテ／花とは。

アド／さればその事でおりゃる。此の中さるお屋敷へ参ったれば、みめのよい女盛りの美しい上臈が、夫に先立たれたその身をはかなんで泣いてござったによって、御坊様にも独り身のことなれば、ともかくも云うて連れて参りましたが、のお、御坊様。庵の花としておいてくだされいの。

シテ／いや妾な者が。云い出いた事は。仏に仕えるこの身に女性はいらぬものじゃ。早う連れてお帰りあれ。

アド／此方思うても見させられ。人を助くるこそ仏の道でござる。その上男と女とは土と花の様なものではござらぬか。花は土のない所には咲きませぬ花を咲かせ実をみのらせてこそ、土も肥沃なものとなりましょうがの。土と花をともに導き育てる雨露の恵みこそありがたい仏の教えと申すものではござらぬか。

シテ／エゝ妾な者が。小賢しい事を云い出いた。とかく男と女のある所には煩悩煩悩。さあ／／早うお帰りあれムニャラ／／／／／／

アド／誠にこのむさい庵には花も不用じゃまで。この石御坊には煩脳即菩提の教えも通ぜぬと見えた。さらば去にまする。（立チカケテマタ座ル）御坊、御坊、の御坊。

シテ／エゝかしましい。何じゃぞいの。

（以下次号）

「うるさし」について

「うるさし」という狂言がある。あまり上演されない曲であるが、西国に住む塩飽の藤蔵という風流人が都に上る途中、明石の浜で茶店に足を止め、茶店の女と言葉を交わす内、女が口にした「うるさし」という言葉の端をとり上げ、その由来を語り、大事の言葉でめったなことで用いる言葉でないとたしなめるが、逆に伊勢物語の古歌をひかれ女にやり込められてしまう。すっかり感じ入った藤蔵は、女に別れを惜しみつゝ去って行く、というものである。（和泉流）「うるさし」は「右流左止」の字をあて、時の右大臣菅原道真公がこの言葉により太宰府に配流とめおかれたという語りである。大蔵流では塩飽の藤三は訴訟で在京中訴訟に勝って清水へお礼参りに行き、そこえ参り合せた女を見初めて言葉を交わ

すという筋立てである。

狂言では登場人物に固有名が与えられることは特殊な事例と云えるのだが塩飽は瀬戸内海に塩飽諸島という島々があり、「東鑑」に塩飽左近入道という人名などが見えているが、特に西国の者という以外に意味のある人名ともうかゞわれない。

ところでこの曲の現曲と見られる曲が天正狂言本に見られる。

きんみつ

一人出て、つの国あしやの里にきんみつと名のって出て、我歌道をよくしんたとゆふ。中にも伊勢物語をよくあきらめたとゆふ。ある時なり平、二てうのきさきを夢に見る。一生かひをくわしく御物語候ひて御帰りある。さて御住家はたつね申候へは、都雲の林と御こたえ候てめさめぬ。都にのほり雲林いんとたつね合、まことになり平の御ゑひあり。ともる。又ゆめにむさし野に伊勢物語のおもしろき事ありとあり。そのままむさし野にくたる。女一人花かこをもち花をつむ。ことはをかける。女うるさいとゆう。うるさいとゆふことはをわらふ。伊勢物語にも此ことはなひとゆふ。女むさしあふみの歌をのそむ。きんみつよむ。

〳〵むさしあふみ。さすかにかけておもふには、とわぬもつらし、とふもうるさし。うるさしのことはつめ。きんみつにける。女おふ。とめ。

この現曲は云うまでもなく、謡曲「雲林院」を題材としていることがわかる。塩飽の藤蔵はそのもとは芦屋の公光だったのである。現行「うるさし」からはすでに「雲林院」のおもかげは殆ど消えてしまっているが、「きんみつ」の前半は全く「雲林院」そのままである。天正狂言本では本来記述は殆ど荒筋だけを簡単にとゞめるにすぎないが、語り、小謡、歌など独立性が強く変改性の乏しい部分はあまり省略されず記載されており、「きんみつ」では「うるさし」の語りが全く見られないのは、或いは欠落したのか、それとも現行曲ほど重要な語り部分として出来上っておらず、省略の憂き目を見たのかもしれない。

こうして見ると「きんみつ」の構成は「雲林院」をふまえるあまり、劇構成として雑然としすぎ、前後半のつながりも悪く、結局「雲林院」と直接関わりのある前半部分はすべてカットされ、大蔵、和泉の両流ともそれぞれ独自の場面設定と結末（和泉流では男女はしみ〴〵とした別れ、大蔵流では二人は手に手をとって入る）を作り出すに至ったものであろう。登場人物名も芦屋の公光の必然性がなくなり、塩飽の藤蔵が生まれ、「右流左止」の語りが自然この曲の中心となって、曲名をも「うるさし」と変改されたものと云えるであろう。（鈍太郎）

能楽協会名古屋支部よりお知らせ

旧冬十二月五日に催しました歳末助け合い義捐能は左記の通り義捐金をそれぞれ県、市へ寄託致しました。

各位の御協力を感謝致します。

愛知県　拾六萬六千五百五拾円

名古屋市　拾六萬六千五百五拾円

二月の予告

二月　六日　宝生会

能　夜討曽我　本間英孝　衣斐正宣　井上礼之助

間　頼政　内藤泰二　西村欽也　井上松次郎

能　求塚　辰巳孝　高安滋郎　大野弘之

間　井上礼之助　大野弘之

狂　雁礫　井上松次郎

二月十一日　邦謡会

二月十二日　寵泉会

二月十三日　観世会

能　羽衣　観世元正　福王輝幸

能　天鼓　観世元昭　高安滋郎　佐藤秀雄

間　井上松次郎　井上礼之助

狂　松囃子　和泉保之

二月二十日　梅猶会

能　雲林院　岡田朗詠　高安滋郎　佐藤友彦

間　梅若盛義　西村欽也

狂　鉄輪　熊沢恵美子　高安勝久　大野弘之

能　熊野

間

狂　蝸牛　井上松次郎　佐藤秀雄　井上礼之助

二月二十六日　九皐会

能　巻絹　吉田妙　西村欽也　佐藤友彦

間　雲林院　塚本秀雄　高安滋郎　大野弘之

間　井上礼之助　井上松次郎　佐藤秀雄

狂　鏡男

二月二十七日　松謡会

賀正

ふぐや

河文

電話代表(231)一三八一番

栄スカイル店

トヨダビル店　地下一階店　〃　二階店

大名古屋ビル店

長者町店

ようせな

船津屋

電話〇五九四㉒一八八〇番

昭和52年2月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7—5
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481) 4745

狂言人語

異常寒波が続きます。各地とも記録破りの寒さ、豪雪とやら。暖冬に慣れた私達をふるえ上らせるものです。どうかお身体にお気をつけ下さい。

さて、能楽堂を離れ名演会館で例会を重ねた名古屋狂言小劇場は一昨年の六月第十回公演をもってしばらく休会しておりましたが、この春四月より再び開催する運びとなりました。どうかよろしくお願い致します。

今年の当地で催される狂言の会を左記の通りご案内申し上げます。

四月十四日（木）於 名演会館
　名古屋狂言小劇場（有料）
五月一日（日）於 熱田能楽殿
　大蔵流狂言名古屋会（無料）
五月二十一日（土）於 熱田能楽殿
　やるまい会（有料）
六月廿三日 於 名演会館
　名古屋狂言小劇場（有料）
七月十日（日）於 熱田能楽殿
　朝日狂言会（有料）
九月十八日（日）於 熱田能楽殿
　和泉流狂言大会（無料）
十月十六日（土）於 熱田能楽殿
　やるまい会
十月下旬頃（予定）於 名演会館
　名古屋狂言小劇場（有料）
十一月廿三日（日）於 熱田能楽殿
　狂言和泉会（有料）

二月の催能

二月　六日　宝生会
能　夜討曽我　本間英孝
　　衣斐正宣
　　間　頼政　内藤泰二　井上礼之助
　　西村欽也
　　井上松次郎
能　求塚　辰巳孝　高安滋郎
　　大野弘之
　　間　塚　井上礼之助
　　大野弘之
二月十一日　狂　雁礫　井上松次郎
二月十二日　邦謡会
二月十二日　西陵商業高校能楽鑑賞会
二月十三日　能　羽衣　観世元正　福王輝幸
　　観世元昭　高安滋郎
　　天鼓　間　佐藤秀雄
二月二十日　狂　松囃子　和泉保之　井上松次郎
　　井上礼之助
　　能　雲林院　梅猫会
　　岡田朗詠　高安滋郎
　　佐藤友彦
　　間　熊野　梅若盛義　西村欽也
　　熊沢恵美子　高安勝久
　　狂　鉄輪　大野弘之
　　間
二月二十六日　能　巻絹　九皐会　井上松次郎　佐藤秀雄
　　吉田妙　西村欽也　井上礼之助
　　間　雲林院　塚本秀雄　佐藤友彦
　　高安滋郎
　　大野弘之
　　間
二月二十七日　狂　蝸牛　井上松次郎
　　能　鏡男　井上礼之助
　　井上松次郎
　　佐藤秀雄
　　松謡会

狂言解説

雁礫＝狩に出た大名。水辺で雁を見つけ、弓矢でねらわんとする所へ通りかかった通行人が先に礫で雁を打ちとめてしまいます。さあ大名は自分が先にねらい殺した雁だからときかいません。仲裁人が入り……。

松囃子＝いつも年の始めにやって来て祝儀の舞を舞う万歳太郎。今年も待兼ねる所へ遅れてやって来て、しかもいつもの舞と違って目出たくありませんそういえば毎年末に太郎の許へ年とり物として米一石持たせてやるのをすっかり忘れていました……。

蝸牛＝百歳に余る祖父に長寿の薬としてかたつむりを冠者に取って来る様云いつけました。かたつむりを知らぬ冠者は教えられた通り藪に出かけますと頭の黒い、腰に貝をつけた山伏が寝ています。冠者はおそる〳〵声をかけました……。

鏡男＝永の在京からやっと故郷に帰る事になった男。妻への土産にと珍しい鏡を買いました。道中も自分の顔を写して見ては面白がっていたのですが女房が喜ぶと思いきや、女は自分の顔を見て男が都から女を連れて来たと云い出します……。

狂言紅白

野村広二

正月の三が日は邦楽放送に明け暮れる。能はテレビの元旦が鞍馬天狗（元正、NHK、以下おなじ）三日が巴（長世）、二日は狂言で米市（藤九郎）と業平餅（千作）。後者は千五郎家四代の出演でまことにめでたい。ラジオの五流謡曲の「翁」は喜多流。狂言は末広かり（万蔵）伊文字（忠一郎・幸四郎）。去年まで二日にあった独吟・一調・小舞は十五日の日にうつる。これをテレビでみて、長年テレビでみたいみたいと思っていただけに大層楽しかった。みながらこれを広げて東西からの出演者を望みたいと念じた。二日は今年も三・四の本を読む。再説日本人のこころ（谷川徹三）万法帰一・談義蛇足（香西精・世阿弥新講、万法帰一は能謡新講掲載の方も）謡曲に於ける仏教要素（姉崎正治・旧能楽全書第一巻、能と禅）文学史の問題（富田彬・米英文学と日本文学）など。それから徒然草の終段「仏はいかなるものにてか候ふらん」のところと方丈記の最後「静かなる暁」のくだりを声をあげて読む。「不請〈ふしょう〉の阿弥陀仏両三遍申してやみぬ」でおわる。七草がゆ（七日）小豆がゆ（十五日）も例年のとおり。きびしい寒さの日々が過ぎて、正月のにぎやかさが次第にいつもの静けさにかえって行く。

さて、新漢字表試案が発表された（二十一日）。蛇（大蛇、道成寺）杉（三輪）や猿（靱猿）殻（抜殻）傘（小傘）などの字が加えられ、翁・薪（薪能）虞（項羽のツレ虞氏）ほか現行からはぶかれることになる。最終答申は五十四年春の由。芸術・科学など専門

分野・個人の使用にまで立ち入ろうとするものでないなど四項目の配慮が添えられているが、翁の字が姿を消すのはさみしい。

昨年末武田光雲氏が逝去され、一月に入って金春栄治郎氏（金春流先々代家元）が他界される。栄治郎氏の能は奈良公会堂・法蓮町の舞台・大阪徳井町の山本能楽堂や中日五流能で卒都婆小町ほかを拝見しているが、奈良の新能（春日社頭）やおん祭りの記憶は薄い。先代家元八条氏が老松の古木ならば栄治郎氏は老杉の大木のびのびとしてすなお堂々としてゆるがず、やわらかくて親しみをも興えた。噛みしめて味の出る芸であった。寡黙な人柄に包まれた「能をする心」がしみとおるように迫ってきた名古屋で古くわ大正十二年四月簸の舞台を記録（旧能楽協会名古屋支部発会能、ワキ宝生新、呉服町能楽堂、田鍋惣太郎編お能の番粗と同氏小皷芸談）にみつける。同十一年十二月には同じ舞台で熊坂（武田嘉男のちの光雲）をみ出す。同氏も名古屋とは古いおつき合いである。

本は、まず狂言辞典（事項編、古川久・小林責・萩原達子編、名古屋関係の項目多し、くわしくは別記、東京堂出版）を挙げねばなるまい。それと、厳に咲く花（滝井孝作、求竜堂、〈謡のけいこ・昭和二年・大調和〉に金春栄治郎氏のこと載る、冒頭狂言〈節分大正七〉ではじまる能・狂言随筆集・写真〈吉越立雄〉多葉）世阿弥・能の美学（国文学・解釈と鑑賞二月号、至文堂）一遍聖絵（一遍と芸能、栗田勇第十四回、芸術新潮五一・十一月号）など。

第十一回
名古屋狂言小劇場（予告）
昭和五十二年四月十四日（木）
名演会館（東新町）

文荷　鷺見正行　佐藤友彦　佐藤秀雄
痩松　井上松次郎　松井直子
武悪　井上礼之助　大野弘之　佐藤友彦

（入場料　一般 八〇〇円・学生 六〇〇円）

名古屋狂言小劇場 再開に当って

名古屋狂言小劇場は、より多くの人に、より手軽に狂言に親しんでもらおうと、昭和四十七年二月、より多くの人々との出逢いを求めて初めて能楽堂を離れ、都心のホールでの定期の狂言会として出発しました。

とりあえず十回公演を目標としその公演活動を通じて新しい道を探り出そう、そんな莫然とした期待と不安とで出発した私達の会ですが、愛好者の方々の暖かい励ましに支えられ、昭和五十年六月、無事当初目標とした第十回公演を終えることが出来ました。この間の上演曲目延べ三十三番、観客動員数延べ千五百名、小さな数字ですが、私達にとって何より大きな成果は、能楽堂を離れた狂言会を都心の小ホールに定着させ得たことでした。

第十回公演を一区切りとしてしばらく休会して参りましたが、此度あらためて出発点に立ち帰り、再出発することになりました。より多くの人々と狂言との出逢いの場として、そして私達自身の研鑽の場として、都心の小ホールにともした小さな灯を、けっして絶やすことなくともし続けること、それが名古屋狂言小劇場のすべてです。大きな炎でなくてよい、新しがる必要など少しもない、それらは別の所で果される役割です。がんこな小さな灯、小さくても確かな灯をめざして、再び名古屋狂言小劇場は出発します。

どうかよろしくお願いします。

名古屋大声会
狂言共同社

三月の予告

三月　六日　九皐会
三月十一日　四大学発表会
三月十二日　梅若六郎古稀祝賀会能
　能松風　梅若六郎　高安滋郎
　　間　佐藤秀雄
　能猩々乱　梅若景英　山本勝一　西村欽也
　狂頼猿　井上松次郎　野村又三郎　井上礼之助　野村信行
三月十三日　清韻会
　能三輪　大槻秀夫　高安滋郎
　　間　佐藤秀雄
　能猩々乱　近藤幸江　泉嘉夫　西村欽也
　狂萩大名　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎
三月二十日　邦謡会
　狂屋島　梅田邦久　西村欽也
　　間　野村又三郎
　能熊野　武田邦弘　高安滋郎
　能鞍馬天狗　片山慶次郎　高安勝久
　　間　井上礼之助　大野弘之
　狂酢薑　井上松次郎　佐藤友彦

地下鉄八事線が開通すると
皆様の清　樂がぐんと近くなります！
◎食堂・座敷・お食事ご宴会にどうぞ
◎割子弁当・仕出し・出前迅速
杁中交叉点角（昭和区隼人町1の1）　TEL. 763－2211

昭和52年3月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7—5
井上松次郎方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481) 4745

狂言人語

異常寒波に終始したこの冬でしたが春は帳じりを合わせるかのごとく、三月の声を聞く頃から急ピッチで春めいて参りました。この分だとしきりに心配された桜前線の遅れも開花の頃迄には充分取り戻され、平年並みか、或いはやゝ遅れる程度になりましょうか。能楽堂前の桜の若木のつぼみがふくらむのも、能会に足を向ける楽しみの一つです。

さて、今月も観世流を中心に催能は盛んです。十二日の梅若六郎師古稀記念祝賀会、六郎師は「松風」を舞いますが、この日の狂言は「靱猿」松次郎の大名に、又三郎の猿曳、そして子猿には又三郎息・信行君が勤めます。元気な、そして可愛い子猿の姿が観客の笑いを誘うでしょう。三月十三日は清韻会、そして三月二十日の邦謡会には梅田邦久師が「屋島(弓流し)」を演じます。この小書では間狂言は特に「奈須語」那須与市の扇の的を射る所を仕形話に語るものです。どうかご期待下さい。

三月の能催

三月　六日　九皐会

三月十一日　四大学発表会

三月十二日　梅若六郎古稀祝賀会能

能　松風　梅若六郎　高安滋郎
　間　佐藤秀雄
能　猩々乱　梅若景英　井上松次郎　井上礼之助
　山本勝一　野村又三郎　野村信行
狂　靱猿　西村欽也

三月十三日　清韻会

能　三輪　大槻秀夫　高安滋郎
　間　佐藤秀雄
能　猩々乱　近藤幸江　泉嘉夫
狂　萩大名　西村欽也　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

三月二十日　邦謡会

狂　屋島　梅田邦久　西村欽也
　間　野村又三郎
能　熊野　武田邦弘　高安滋郎
能　鞍馬天狗　片山慶次郎　高安勝久
　間　井上礼之助　大野弘之
狂　酢薑　井上松次郎　佐藤友彦

狂言解説

靱猿＝狩に出た大名、猿曳の曳く猿を見て、自分の靱を張り替えるため猿の皮を貸せと云い出します。弓矢で威して無理矢理承知させたのですが、猿の無邪気さについホロリ、猿の命を助け、猿曳は猿に喜びの舞を舞わせます

萩大名＝訴訟で在京中の大名、近日本国に下ることとなり、今日は清水へ遊山に出かける事となりました。清水の茶屋の庭先で名物の萩の花によそえあらかじめ用意の歌を太郎冠者の協力で詠もうとするのですが……。

酢薑＝都へ上り合せた酢売と薑売、(はじかみ＝しょうが)互に商売司を争って系図争いから、商売物によそえての秀句争いに発展しますが、酢としょうがは料理にはつきもののこと、やがて和解し、相商いにする事として笑い留めとなります。

狂言同心

野村広二

寒い日が続く。雪の節句(ひなまつり)にはならずにすんだが、四日は雪だった。

冷めたい日に、雪の路、新幹線の遅れ、風邪ばやりと旅行の足が渋る近ごろ、能界は賑かだが、家に閉じこもって、テレビをみラジオをきく時間は相変らず多い。古典芸能の放送は楽しみ。ドラマそのほかに能・狂言の一コマみ出すのも楽しい。この頃の放送ではまず「薪能」(中京テレビ、放送おわる)幻花(二・二一の分、千鳥の八ちりちりやちりちり)名古屋テレビ)その人は今(三・七の分、観世能楽堂の松風、NHK)。それにクイズ・グランプリ(東海テレビ)昨秋から三月上旬までの出題には序破急・狂言方・狂言・喜多流・鉢木など。

さて、受賞のこと。五十一年度の芸術選奨は文部大臣賞に高橋進氏(宝生流)同新人賞に山本則直氏(大蔵流)に決まる。めでたい。名古屋でも第二回名古屋市芸術奨励賞を共同社佐藤友彦氏が受けることになった。今後一層の修練を望みたい。

次に、二月の演能は、重厚円熟の求塚(辰巳孝、地頭大坪十喜雄)格調正しい羽衣(元正)能の哀愁とおもしろさを味わせた天鼓(元昭)ひきしまった美しさに溢れる熊野(梅若盛義)など心を楽しませた。地元内藤泰二氏(宝生流)は味わい豊かな頼政、熊沢恵美子さんは型のきれいな鉄輪(梅猶会)を舞って目を奪う。狂言は松囃子(保之・松・礼、観世会)が明るくめでたいなかに人間の心の機微をすなおにみせておもしろかった。

いつもの放送は、テレビ、春日若宮おん祭(芸能百選、NHK、以下おなじ、思い出深い内容)四つの器楽(能楽囃子・獅子、大五郎・寿・春雄・惣右衛門、邦楽まわり舞台)出雲の阿国再見(念仏踊ほか、和泉稚子、話本田安次)隅田川と仕舞実盛(梅若六郎、NHK劇場、佳)素袍落(茂山千作、NHK古典芸能鑑賞会、佳)。ラジオは邦楽DT(玉三郎・ゲスト寿夫)。本は高木市之助全集・第五巻・平家物語の論と中世の窓(鎌倉宝町時代文学・近古文学と時代精神・中世心・中世文学における英雄の類型・私にとって

中世的なもの・室町小歌ほか、解説永積安明、講談社）世阿弥・能の美学（国文学解釈と鑑賞二月号、至文堂）特集中世的世界（伝統と現代三月〈四四号〉伝統と現代社）編年体日本古典文学史（国文学二月臨時増刊号、応永八―永享二〈一四二一―一四三〇〉の特記事項欄には世阿弥能楽論を執筆ほか学燈社）能楽対談・能楽タイムズ三百号を記念して（丸岡大二・羽田昶〈ひさし〉同三月号）など。

付。一月号、一昨年が昨年（千作翁のこと）わが胸を打つ。演能のことは云々の句点を欠き、貪欲が貧欲、能の話（野上豊一郎）が能（野上豊一郎）になっておりました。お詫びして訂正します。

舟吸膏薬

「膏薬煉」という狂言がある。京と鎌倉の膏薬煉の名人が、互いに相手の名声を聞き知り、その効力を競わんとして海道で行き逢い、系図争いから終には両者の実力行使、互に膏薬を鼻の先に張りつけて吸い比べるというものである。この系図争いで互いの膏薬のいわれを語るのだが、現行曲では大蔵和泉両流とも鎌倉方が「馬吸膏薬」、都方は「石吸膏薬」となっている「馬吸膏薬」は名馬いけづきが馬屋を離れとって出て、既に米粒程に小さくなるまで遠去かった馬を、見事膏薬の力で指の先まで吸い戻したと云い、「石吸膏薬」は八千人の人足が運んだ比叡山の大石を膏薬の力で指先に吸い寄せ、築地を持ち越して内裏のお庭の内に運び込んだものという。いずれも大した効力であるが、その薬味も効力の大言壮語にふさわしく、色々珍しい物が調合されている。

馬吸・地を走る雷、空を飛ぶ胴亀・木になった蛤
石吸・白鳥、赤犬の生膽、三足の蛙
（狂言記）
馬吸・石の腹わた、木になる蛤、蚯蚓の胴骨
石吸・空をとぶ泥亀、地をはしる雷、雪の黒焼　（大蔵流虎寛本）
馬吸・空をとぶどう亀、榎になった蛤
石の腹わた
石吸・六月の十三日にふった雷の黒焼
千尋程深い海の底にはゆる竹の子、雷のまつ毛（和泉流雲形本）

この他、蚕の牙の一尺八寸ある物、天狗の影干し、空をとぶひきがえる等流派、各家によって珍しい秘伝がある様である。鷺流では「石吸」に対して「雁吸」となっており、これは膏薬を陽に当てようと外に出しておいたところ、ばた〳〵と騒しい音がするので外に出て見ると、空を渡る雁がみな吸い寄せられていたというものである。

ところで「天正狂言本」（現存する最古の狂言台本）によると鎌倉方の「馬吸膏薬」に対し、都方は「舟吸膏薬」と見えている。その効力仔細は次の通りである。（　）内は注。

さてもげんりやくぐわん年（元暦元年）三月十八日のことなりしに、八嶋段の浦にて、源氏はくが（陸）、平家はあ海、十丁斗（ばかり）に舟をうかぶ。然る所に、汀にむかって小舟一そふうかぶ。よしつね御らんじて、たれかある、あの舟とってゑさせいへ〳〵と御ぢやうある。おほせうけたまはると申て、かうやくをとり出し、ひたひにちゃうとねりつけ、舟の方をはったとねらむ（にらむ）。かの舟かうやくにねられ、ひたひの本（もと）へちゃうとくる。かの舟おっとってよしつねに参する。君御かんあって舟すひかふやくと御はん（御判）をたまわんて（賜って）候。　（鈍太郎）

四月の予告

四月　三日　竜吟会
四月　十日　観世会　十二時半始
能 杜若　梅若万三郎　西村　欽也
能 藤戸　武田太加志　高安　滋郎
間　井上松次郎
狂 鍋屑　野村又三郎　佐藤　秀雄
間　井上礼之助
四月十四日　大声会　於名演会館
狂 文荷　鷺見　正行　佐藤　秀雄
狂 痩松　佐藤　友彦　松井　直子
狂 武悪　井上松次郎　大野　弘之
井上礼之助　佐藤　友彦
四月十七日　中部金剛会　十一時始
能 鶴亀　豊島三千春　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能 田村　百々　康治　西村　欽也
間　井上松次郎
能 羽衣　牧野　元子　高安　滋郎
能 土蜘蛛　日比野圭昭　高安　勝久
間　大野　弘之
狂 しびり　佐藤　融　佐藤　友彦
狂 文山賊　井上礼之助　井上松次郎
四月廿三日　猶諷会
能 隅田川　杉田　合子　西村　欽也
四月廿四日　久田観正会
能 舟弁慶　伊藤亜久里　高安　滋郎
大脇寿美子
間　井上松次郎
四月廿九日　幸友会

外科・せいけい外科・皮膚、泌尿器科
東山整形外科
TEL781―7835
東山公園駅下車　オークランドビル2F

狂言

昭和52年4月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7—5
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481) 4745

狂言人語

春とともにいよ／＼演能は盛んです狂言の会も多く企画されております。四月十三日は名演小劇場で「名古屋狂言小劇場」の再開、第十一回です。手軽な狂言会の夕として再び皆様に親しんでいただけるものと思います。五月に入ると一日には「大蔵流狂言名古屋会」すっかり当地に定着した大蔵流の会員諸氏の発表会。なごやかな会と云えましょう。そして五月二十一日には「やるまい会」野村又三郎師の主宰する本会は大蔵和泉両流の名手を集め、充分狂言の魅力を堪能させてくれるでしょう。どうか御期待下さい。

四月の催能

四月　三日　竜吟会

四月　十日　観世会　十二時半始

能　杜若　梅若万三郎　西村　欽也
能　藤戸　武田太加志　高安　滋郎
　　〃　　井上松次郎
狂　簸屑　野村又三郎　佐藤　秀雄
　　井上礼之助
四月十四日　大声会　於名演会館
狂　文荷　鷺見　正行
　　佐藤　友彦　佐藤　秀雄

狂　渡松　井上松次郎　松井　直子
狂　武悪　井上礼之助　大野　弘之
　　佐藤　友彦
四月十七日　中部金剛会　十一時始
能　鶴亀　豊島三千春　高安　滋郎
　　間　佐藤　友彦
能　田村　百々　康治　西村　欽也
　　間
能　羽衣　牧野　元子　井上松次郎
　　間　高安　滋郎
能　土蜘蛛　日比野圭昭　高安　勝久
　　間　大野　弘之
狂　しびり　佐藤　融　佐藤　友彦
狂　文山賊　井上礼之助　井上松次郎
四月廿三日　猶諷会
能　隅田川　杉田　合子　西村　欽也
四月廿四日　久田観正会
能　舟弁慶　伊藤亜久里
　　大脇寿美子　高安　滋郎
　　間　井上松次郎
四月廿九日　幸友会

狂言解説

簸屑＝宇治橋供養の節参詣人に接待するため簸屑（くず茶）を挽く様云いつけられた太郎冠者、悪態を云いながら茶を挽きますが眠くてたまりません使いから戻った次郎冠者が眠気ざましに咄しをしたり舞を舞ったりしますが遂に太郎は眠りこけてしまいます。腹を立てた次郎は、太郎の顔に鬼の面をかぶせておきます……。

しびり＝俄の来客のため・和泉の堺へ肴を買いに行く様云付けられた冠者行くのがいやで、しびりが起って歩かれぬと云い出しました。一計を案じた主人は……。

文山賊＝揃って意気地のない山賊二人。今日も獲物を取り逃した挙句、口論がつのって遂に差し違えて死のうということになりました。格好よく組み合ったものの山中のこと、事情を知る者もないため、このいきさつを書き遺そうと書き置きを記しましたが、二人揃って読み返すうちに……。

狂言同心

野村広二

今年ももう四分の一が過ぎる。そして梅も桃も桜もいっしょに咲く春の季節を迎える。四月三日の竜吟会（藤田六郎兵衛）には能楽堂外の桜の花がきれいであった。五日の伊勢神宮奉納金春能も伊勢の桜が見事であったろう。

三月は三つの観世能と中日五流能。さて名古屋では道成寺をこ数年見ない。それが五月に福井初太郎・五郎追善能でおこなわれる（シテ辰己孝、小鼓福井良治で五郎氏孫に当る）。宝生流（上掛り）である。上掛りは鐘を吊ってからワキ僧が登場する。すっきりした様である。これに対し下掛りはワキ僧がでてから鐘が「えいとうえいとう」と持ち運ばれて、にぎやか。この三日京都でその道成寺・古式（金剛流）をみる途中伊吹山にはまだ雪が残り、関が原の農家にみる桜の花盛りが目を射た。広田兄弟後援会二十五周年記念の能。シテは兄の陛一（のりかず）氏。見事な道成寺であった。五月の道成寺を期待したい。

三月の梅若六郎氏は古稀の祝いの能で松風・見留を舞われた。東京は春の曲羽衣、名古屋は秋の曲。秋には老女物と道成寺の舞台の由。優婉きわまりない松風で、闌（た）けたる位とはあれを言うのであろう。能の美しさが眼に焼き付き、詩心を豊かにした。因みに六郎氏の道成寺初演は大正十五年とのこと。五十年も前である。同会の狂言は靭猿（サル引き又・サル野村信行と大名松・太郎冠者礼）。前半ひきしまり後半明るくのびのびとしておもしろし。昨今名古屋で活躍めざましい梅田邦久氏（邦謡会）が屋島・弓流を舞う。強く美しくよかった。

五十一年度の日本芸術院賞に茂山千作翁が選ばれる。重ねてめでたい。この朗報にひきかえ、中島成晃（シテ方観世流）森田光治（笛方）幸祥光（小鼓方幸流家元）の各氏が逝去される。ご冥福をお祈りします。

催しは日展（中日）に黒川能鼓方（森田茂）古風な店頭（能面と扇、和田良治）あり。東京歌舞伎座四月公演で新作「花のゆくえ・世阿弥」（北條秀二作・演出、義教将軍と世阿弥・勘三郎、元雅・幸四郎、一休宗純・鴈治郎ほか、四・九東京新聞・戸板康二評関連）が上演されている。

放送は望月（友枝喜久夫、NHKテレビ、以下おなじ）。ほかにだったん

の行・東大寺お水取り（修二会、佳）それとチャップリン小劇場（語りフランキー堺）を狂言とみくらべながら大変おもしろくみた。去年の夏から今年三月まで三回にわたり計十九本。本は和泉流家系考・狂言師和泉をめぐって（関屋俊彦、芸能史研究五五号、和泉出演記録添えらる、寛永八―嘉永四の二一六回の豊富な資料）とうとうたらり（山本ユリ、能楽タイムズ五二・一月）式三番考（後藤淑、金剛九八号、寄贈）雨乞いと道成寺（金井清光、同九七号、同）消滅えのあこがれ（特集・仏教・私との対話、隅田川・山姥関連馬場あき子、大法輪二月）青眉抄（上村松園、謡曲と画題ほか、三彩社、再出版）など。

蝸牛（かぎゅう）

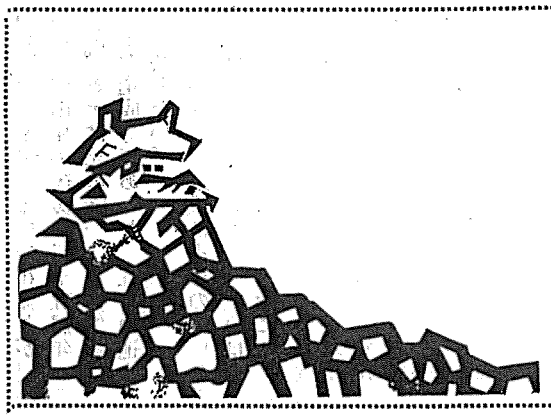
現行和泉流では、囃子物で山伏を同道する冠者を、様子を見に来た主人があれはかたつむりではなく山伏であることをやっと納得させ、二人で追い込む。大流流では主人までが楽しい囃子物につり込まれ、三人が浮かれながら幕入りするというものである。

大蔵流では古い台本には本曲は見当らないが、和泉流でさかのぼって見よう。古台本ではすべて主従ではなく親子となっており、太郎冠者に当るのは金法師であって、かたつむりが何かを知らぬのもうなづける。最古の「天理本」によると、山伏が金法師を背負い様々に浮かれ、後はシャギリ留メとなる。親は子供に云いつけた後は再び登場しない。長い演出の変遷の歴史の中で過渡期の様相を示しているのが「波形本」及び「型付本」（いずれも和泉流である。まず「波形本」では、小供を背って浮かれている山伏を様子を見に来た親が見付けて声を掛ける。山伏を人買いときめつけ、口論の末に山伏は〳〵くやむな男、と祈るが、すぐ親子に追込まれる。「型付本」では、様々の演出を伝えている。まず、第一に右の波形本と殆ど同様の、祈り、追込みの型を記し、「又右之通ニスル事モ有」として「シテ出テネル、アト太郎ヲ呼出シ云付ル」と主従構成の演出で、以下囃子物は太郎冠者が扇を打て浮かれる今日の型となり、主人が出て二人で追込む。さらに〳〵又主追廻ス時、シテ笛サヘニケテ、てん〳〵ヲ云、主又追ト、シテワキサヨリてん〳〵ヲ云ヲトルト、主太郎二人共ウキテ主太〳〵雨も風もヲ云、扇を打テヲトリ入事モ有と現行大蔵流と同様演出を伝え、さらに〳〵又右之通ニモスル、と三人が浮きとなってすぐにシャギリドメとなり、〳〵てんてん虫々ト云、四拍子ヲフミトメシテヨリ先、次ニ主太郎順ニ入也とシャギリ留メを記し、最後に「殊外色々仕様有、可有工夫」と結んでいる。

親子の構成は本来大祖父―親（孫）―子（ひ孫）という家族構成で、さらに長寿の薬、そしてシャギリ留という祝言的な色彩が非常に濃かったといえるのだが、子供の出演には制限があり、人気曲として次第に主従で演ぜられる機会が多くなったものであろう。大蔵流の演出がシャギリ留メの趣意から見れば或いは古体をとどめるとも考えられる。現行和泉流では、山伏が二人に追われて一たん呪文で姿を消すという趣向を加えており、右の演出の変遷では主流であった山伏の祈りの工夫をかえたものと考えられるであろう。（鈍太郎）

五月の予告

五月一日　大蔵流狂言会
五月三日　観世流友会
五月五日　巽会　午前九時始
能　鶴　小沢喜一　佐藤友彦　高安滋郎
能　胡蝶　永井喜美　大野弘之　西村欽也
能　乱　高田真六　井上礼之助　高安勝久
狂　清水　井上礼之助　井上松次郎
五月八日　青陽会
能　巴　前野都子　佐藤友彦　高安勝久
間　万　梅田邦久　佐藤秀雄　高安滋郎
能　百　大槻文蔵　西村欽也
間　一角仙人　井上松次郎　井上礼之助
狂　地蔵舞
五月十四日　九皐会
能　小袖曽我　観世喜之　武雄
間　若　佐藤秀雄
能　杜　有賀滋子　西村欽也
狂　鬼瓦　野村又三郎　佐藤友彦
五月十五日　鳳鳴会
半　山姥　三村恵子　山本一　高安滋郎
五月廿一日　やるまい会
狂　蚊相撲　野村万之丞　石田幸雄　野村万作
〃　しびり　野村信行　野村又三郎
〃　清水座頭　野村万作　野村又三郎
〃　空腕　茂山千之丞　茂山あきら
語　文蔵　野村又三郎
〃　腰祈　井上松次郎　井上礼之助　佐藤友彦
五月廿二日　観衛会
五月廿八日　福井家追善囃子会
五月廿九日　福井家追善能
能　安宅　観世武雄　高安滋郎
間　井上礼之助　佐藤友彦
能　道成寺　辰巳孝　西村欽也
間　野村又三郎　佐藤秀雄
狂　大般若　井上松次郎　野村又三郎　大野弘之


城
割烹・小料理
熱田能楽殿内喫茶部
・住吉小路（中区栄3-10）
電話241-0248

狂言

昭和52年5月1日発行
発行人
名古屋市中区橋一丁目7—5
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481) 4745

狂言人語

政界を真二つに割って、全国的にも大きな注目を集めた名古屋市長戦も終わり、第二期本山市政が出発しました。芸どころ名古屋の金看板が今も営々と掲げられている反面、しば〳〵文化不毛の地、と陰口を叩かれているのも事実です。どちらも現在の名古屋の一面を云い得ていると云えましょう。東西の二大文化圏の中間に位置して本来そ地の利のを充分に生かして独自の文化圏を築けるべき条件がある筈ですが、現実にはそれが落ちこぼれた文化の谷間となっているようです。名古屋の良い意味での伝統を正しく受け継ぎ、その上に立って名古屋の独自の文化、芸術を育生したいものです。芸術文化に行政の関わり方は一面では難しいものがありますが、その保護、育成、発展に思い切った援助等一層の力を注いでもらいたいものです。

五月は演能も盛んです。狂言の会も「大蔵流名古屋会」(二日)、「やるまい会」(二十一日)と続きます。別掲案内のごとく「朝日狂言会」も予定されております。その他、六月二十三日には予定の通り「名古屋狂言小劇場」も開催されます。いよ〳〵盛んなシーズンです。どうか充実した舞台にご期待下さい。

五月の催能

五月一日　大蔵流狂言会

五月三日　観世流友会

五月五日　巽会　午前九時始

能　鵺　小沢喜一　高安滋郎
　　佐藤友彦
能　胡蝶　永井喜美　西村欽也
　　大野弘之
能　乱　富田真六　高安勝久
狂　清水　井上礼之助　井上松次郎

五月八日　青陽会

能　巴　前野郁子　高安勝久
　　佐藤友彦
能　百万　梅田邦久　高安滋郎
　　佐藤秀雄
能　一角仙人　大槻文蔵　西村欽也
狂　地蔵舞　井上松次郎　井上礼之助

五月十四日　九皐会

能　小袖曽我　観世武雄
　　観世喜之
　　佐藤秀雄
能　杜若　有賀滋子　西村欽也
狂　鬼瓦　野村又三郎　佐藤友彦

五月十五日　鳳鳴会

半　山姥　三村恵子
　　山本一　高安滋郎

五月廿一日　やるまい会

狂　蚊相撲　野村万之丞　石田幸雄
　　野村万作
〃　しびり　野村信行　野村又三郎
〃　清水座頭　野村万作　野村又三郎
〃　空腕　茂山千之丞　茂山あきら
〃　語文蔵　野村又三郎
〃　腰祈　井上松次郎　佐藤友彦
　　井上礼之助

五月廿二日　観衛会

能　井筒　三宅川公香　高安滋郎
　　野村又三郎

五月廿八日　福井家追善囃子会

五月廿九日　福井家追善能

能　安宅　観世武雄　高安滋郎
　　井上礼之助
能　道成寺　辰巳孝　西村欽也
　　野村又三郎　佐藤秀雄
狂　大般若　井上松次郎　野村又三郎
　　大野弘之

狂言解説

清水＝野中の清水でお茶の水を汲んで来る様云付けられた冠者。行くのが嫌さに桶をかくして、鬼が出たと偽り逃げ帰ります。半信半疑の主人は桶を捜しに清水へ出かけたため、冠者は仕方なく自身が鬼に変装して……。

地蔵舞＝旅の出家が行暮れて宿をとろうとしまが、亭主が大法を楯にしてどうしても泊めてくれません。一計を案じた坊主は持参していた傘だけを泊めてもらい、こっそりその傘をかぶって傘に宿をかりたと申しひらきをします。坊主の機智に感じた亭主は快く宿を貸し、やがて酒盛が始まります。

鬼瓦＝訴訟に勝って晴れて故郷へ下る事になった大名。お礼参りに因幡堂へ冠者を伴って出かけます。やがて故郷へ下ったら堂を建立しようと堂の造作をながめる内、突然大名が何を想ったか泣き出しました。冠者が尋ねると大名が示したのはいかつい顔の鬼瓦故郷に残した、いとしい妻の顔にそっくりです……。

大般若＝信仰篤い壇那のもとに、毎月の晦日祓い（みそかばらい）の神子（みこ）と月参りの坊主とが同時に鉢合せでやって来ました。やがてそれ〳〵が勝手に坊主は大般若の続経、神子は賑やかに神楽を奏し始めます。

狂言同心

野村広二

五月一日は熱田神宮舞楽神事。よく

晴れた日で、参道に足を入れると遠くから風に乗って太鼓の重い音が響いてくる。抜頭（ばとう、長谷晴雄）をみ還城楽（げんじょうらく、山本文彦）を残して能楽殿に向う。天と地につながる人間の表現する心に広々としたものを感ずる。その日は大蔵などや会。大蔵さんに教えられた通りすなおに演じ、そこから狂言をする喜びと楽しみを引き出す舞台姿に好感を寄せる。毎回そうであるが、今回（第七回）も同じそして結びの小舞海人（圭五郎）名取川（大蔵）の底力ある大きな芸に接し心が引きしまった。また午前中はラジオで「幸祥光さんをしのぶ」（話増田正造、謡曲狂言の時間、NHK、以下おなじ）をきく。感銘深し。

関西では豊嶋弥左衛門氏（金剛流）が人間国宝になられた。金剛流のためにはもちろん関西の古典芸能のためにも喜ばしいことである。円満な人柄の豊嶋氏がいよいよ健在であられるよう祈りたい。

四月は観世会が美しい杜若（万三郎）と母情深い藤戸（太加志）の二番。中部金剛会が四番能で充実振りをみせる。久方振りにみた、土蜘蛛（日比野圭昭）は小気味がよい。名古屋狂言小劇場が再開される（第十一回）。友彦・弘之両氏が礼之助氏と組んで武悪を演ずる（弘・武、友・太、礼・主）初演の芸に磨きがかかって次代え立派に受け継がれていくよう願って止まない。

さて能・本説と展開（小林責、増田正造・羽田昶編）を贈られる。小林さんに三月金剛能楽堂でお目にかかったとき、こんど大学用の能の教材書ができますとのお話だったが、贈られた立派な本を手にしておよそ教科書らしくないよい教科書だと感嘆する展望（江戸邦楽・芸能ほか）は広いし、現代と結び付き、細かい点（謡い方）にも配意されて行き届いている。桜楓社版である。実は私が立教の予科一年で飯田豊教授からその自著、地味な「謡曲・狂言と前代文学」（昭七、同文社）をもとに謡曲（能）とその出典について教わったことを思い出す。謡曲文学にまとまった時間接した最初である。

飯田教授は喜多流をたしなまれ、晩年はワキ僧のことをまとめたいと楽しそうに語られた。新しい本が広く用いられることを切望したい。

放送は小袖曽我と仕舞山姥（宝生英雄・英照、仕舞大坪十喜雄）。

本は高木市之助全集第九巻（故人今人のうちに故桜山壮次君と狂言・平林徳次君ほか、講談社）小袖・能装束（染と織シリーズ・夏、太陽、平凡社、肩衣ほか解説のる）カブキ花のゆくえ・世阿弥（朝日四・一九演劇評＜地＞観世五月号展望欄＜と＞ワシントンで能面・能装束展（徳川美術館所蔵品、初日四月七日にはカーター大統領夫妻参観、観世五月同欄・朝日＜月日未詳＞）週刊読売表紙・桜川（森田鉱平、四・二三号）など。

六月の予告

六月　四日　一謡会

六月　五日　熱田祭協賛奉納能

能　鶴亀　加藤総兵衛　高安勝久　佐藤友彦

間　胡蝶　鈴木義久　稲川寿一　佐藤秀雄　高安滋郎

能　小鍛治　日比野圭昭　西村欽也　大野弘之

間　水　井上礼之助　井上松次郎

狂　清

六月十二日　観世会

能　弱法師　梅若六郎　高安滋郎

間　佐藤秀雄

能　善界　観世武雄　西村欽也

間　大野弘之

狂　伊文字　井上松次郎　佐藤友彦　井上礼之助　大野弘之

六月十九日　宝生会

能　景清　宝生英雄　高安滋郎

能　鉄輪　野口緑久　西村欽也

間　大野弘之

狂　文蔵　佐藤秀雄　井上礼之助

六月廿三日　大声会　於名演会館

狂　附子　歌村鴻助　井上礼之助

狂　因幡堂　佐藤友彦　驚見政行

狂　素袴落　井上松次郎　井上礼之助　佐藤秀雄

六月廿六日　茲水会

能　田村　深見一枝　深見賀子　佐藤秀雄　西村欽也

間

能　羽衣　奈倉早苗　高安勝久

能　舟弁慶　佐藤千代子　森川みどり　高安滋郎

間　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

狂　成り上り　野村又三郎

第十九回　朝日狂言会

昭和五十二年七月十日
午后一時卅分始
熱田神宮能楽殿

番組

佐渡狐　佐藤秀雄　佐藤友彦　井上松次郎

附子　大蔵基嗣　大蔵基義　大蔵弥太郎

井碆　和泉保之　野村又三郎

鎌腹　大蔵基義　大蔵弥太郎　大蔵基嗣

神舞　藤田六郎兵衛　後藤孝一郎　筧鉱一　鬼頭喜太郎

閻罪人　井上礼之助　歌村鴻助　井上松次郎　今枝良治　石田喜樹　驚見政行

主催　朝日新聞社　狂言共同社

入場料　指定席二、〇〇〇円　普通席一、五〇〇円
階上席一、〇〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各百貨店プレイガイド
事務所　中区橘一丁目七―五　井上方　電(〇〇)一四三〇

狂言

昭和52年6月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7－5
井上松次郎方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電 (481) 4745

狂言人語

暑い夏がすぐやって参ります。絽入れ胴着の上に幾重にも裝束を重ねて着込み、かつらをかぶり、面をつけ……夏は演者にとっても大変なものです。以前には盛夏の頃は自然演能の会も夏期休暇に入り、裝束を付けぬ袴能、或いはゆかた等での稽古会がこれに替って行われたものですが、近年はどの劇場ホールも冷房完備、能楽堂もその例にもれず、夏の暑さを克服して別掲予告の通り演能の会が盛んです。こうした脱季節的とでも云うべき状況が生れる反面、逆に夏の風物誌とも云うべき薪能などの人気は高まる一方です。

夏の一夜、神宮の森に涼を求め、ゆかたがけで団扇を片手に、赤い炎に浮び上がる幽玄の世界は、しばし現実の世界から私達を切り離してくれるでしょう。

暑中御見舞

昭和五十二年盛夏

狂言共同社
名古屋和泉会

年々盛大に催される当地の薪能も本年は二日間にわたる催しとして計画されております。どうかご期待下さい。

六月の催能

六月　四日　一謡会
六月　五日　熱田祭協賛奉納能
能鶴　間亀　加藤総兵衛　高安勝久　佐藤友彦
能胡　間蝶　鈴木義久　稲川寿一　佐藤　高安滋郎　秀雄
能小鍛冶　間日比野圭昭　大野　西村欽也　弘之
狂清水　能弱法師　間梅若六郎　佐藤秀雄　高安滋郎　西村欽也　井上松次郎
六月十二日　観世会
狂伊文字　井上松次郎　佐藤友彦　井上礼之助　大野弘之
能善界　間観世　武雄　大野　西村欽也　弘之
六月十九日　宝生会
能景清　能鉄輪　間宝生英雄　野口緑久　大野　高安滋郎　西村欽也　弘之
狂文蔵　佐藤秀雄　井上礼之助
六月廿三日　大声会　於名演会館
狂附子　歌村鴻助　井上礼之助
狂因幡堂　佐藤友彦　大野弘之
狂素袴落　井上松次郎　鷺見政行　井上礼之助　佐藤秀雄
六月廿六日　茲水会
能田村　深見一枝　深見賀子　西村欽也
能羽衣　佐藤秀雄　奈倉早苗　高安勝久
能舟弁慶　佐藤千代子　森川みどり　高安滋郎
間　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎
狂成り上り　野村又三郎

狂言解説

清水＝野中の清水へ行って水を汲んで来るよう云い付けられた冠者、行きたくないため桶を隠して、清水に鬼が出たと偽って逃げ帰ります。半信半疑の主人が桶を捜しに清水へ出かけたため、冠者はやむなく自分が鬼に化けて主人を威し、ついでに日頃の不満も主人にぶつけます……。

伊文字＝冠者を伴い清水の観世音に申し妻をした男、早速お告げの通りお妻にめぐり逢いました。迎えを出そうと妻の在所を尋ねると「恋しくは訪うても来ませ、い……」一首の歌をのこして女は消えてしまいます。この下の句をどうしても思い出せない主従は、歌関を設け、通行入を止めて下の句をつけさせることにしました……。

文蔵＝主人に無断で京内参りをした冠者、その話をするのですが、伯父御様の所で御馳走になった物の名がどうしても思い出せません。主人が好んで語る絵草紙の内にあったと言うのでやがて源平盛衰記の内より石橋山合戦の条を語ることとなります……。

成り上り＝主人のお供で鞍馬参りをした冠者、やがて通夜をする内、大切に抱えていた主人の太刀が、いつのまにか青竹にすりかわっています。さてはスッパに盗まれたものと気付きますがこの云い訳に熊野の別当のくちなわ太刀の故事を主人に咄して聞かせます

狂言同心

野村広一

五月下旬。やるまい会（十九回）。催主又三郎氏はしびりと清水座頭の女と文蔵の語りの三役を勤める。しびりの太郎冠者は子息信行君、かわいらしさが目をひく。清水座頭は万作氏の座頭と組んでしみじみとした味を出す。文蔵の語りも格調あってよし。「興がった面じゃな」（蚊相撲、万之丞・万作）「男の心と大仏の柱は太きが上にも太かれ」（空腕、千之丞）はいつきいても楽しい場景。なお蚊相撲は大名が大うちわであおぐ。共同社では太郎冠者がうちわを手にするように覚えている。また二十九日の福井家追善能は文字通り盛会。翁（囃子、喜之）でおごそかにはじまる。当日の安宅と道成寺の能組は記憶に間違いがなければ随分と前（三十四年）の名古屋朝日五流能以来ではないかと思う。その時は安宅九郎・道成寺本田秀男の両氏（今は

ともに故人）であった。道成寺の辰巳孝氏は名古屋で二回目のはず。一回目は福井啓次郎氏の記念能。福井家とはゆかり深い。この日の道成寺の小鼓は福井良治青年（十二代）。安宅（武雄子方喜正）の小鼓は良久氏（十代）が打つ。父も子も小鼓の家の面目にかけてめでたく大役を果す。豪華力演の安宅、静と動、地味な中に迫力を見せた道成寺。はじめの翁は小鼓が幸円次郎義太郎・正昭の三代。観世喜之氏も武雄・喜正の三代で参加、芸の伝承のきびしい長さを感ずる。狂言は大般若（松・又・弘）おもしろし。六月に入って十二日観世会。見事な弱法師・盲目の舞（六郎）にたんのうする。能の世界が冷えた芸のうちに充満する。眼福とはこのことであろう。

栗林貞一氏五月に逝去さる。戦前名古屋の朝日新聞社におられた。布池能楽堂で観能とともに名古屋能楽普及に努力される。金剛能楽堂でお目にかかるときまって名古屋の昔話や現状も話題になった。静かな語り口で。特に先代金剛巌氏を尊敬しておられたことは申すまでもない。数年前金剛永謹氏の道成寺のとき室町でお話を承ったのが最後であった。

放送は歴史と文明・花の文化史・花と宗教（ゴッホと世阿弥、勅使河原霞小川国夫）ジャン・ルイ・バローにきく（教養特集）をみ、羽衣（巌）と鵜之段（永謹）采女と石橋（橋岡久馬、いづれもNHK）をきく。また再放送で葵上（道雄、テレビ）と隅田川（六郎、FM）も。本は萬聞書（鷺流狂言伝書宝暦名女川本、能楽資料集成第七巻法大能研編、わんや書店）能楽研究（第三号、同）日本の鬼（芸団協公演、スターダスト欄、芸術新潮、五月号）能と拍手（梅若六郎、随筆欄、同六月）来日のルノリバロー劇団関係（能の所作と変声、高恵美子、朝日四・三〇ルノーのユーゲンヌとシフエール教授訳世阿弥伝書、渡辺守章、同五月六日実演と討議の会、同五・一七ほか）能現代におけるその地平（観世寿夫・渡辺守章、展望六月号）。

付、執筆前後アメリカの徳川美術館所蔵能・狂言面と装束展から一足先きに帰られた跡部佳子さんを訪ね、大型の立派な解説書（英文）をみせていただく。伊勢門水遺作展（丸栄スカイル、六・十八―二三（開かる後記にゆづりたい。

七・八・九月の予告

七月 十日 朝日狂言会 佐渡狐 佐藤秀雄 佐藤友彦 大蔵基嗣 大蔵基義 井上松次郎
狂 附子 大蔵弥太郎
狂 井礎 和泉保之 井上祐一 野村又三郎
狂 鎌腹 大蔵弥太郎 大蔵基嗣 大蔵基義
狂 闘罪人 井上礼之助 井上松次郎 大野弘之 佐藤友彦 今枝良治 歌村鴻助 石田喜樹 鷺見政行

七月十六日 麦の会
能 半蔀 長田曉 佐藤友彦 西村欽也
狂 二九十八 安達原 久田徹二 高安滋郎
七月二十三日 九皐会
能 経正 井上松次郎 大野弘之 井上礼之助
能 三笑 観世武雄 高木美智子 高安滋郎

七月二十六日 第一回松明能 於 木曽上松町玉林院
能 巴 辰巳孝 高安滋郎 佐藤秀雄
狂 棒縛 井上松次郎 井上礼之助 佐藤友彦
七月卅一日 観世流素謡会
能 小袖曽我 日比野圭昭 百々康治 佐藤秀雄
八月 六日 薪能 五時卅分始
能 舟弁慶 梅田邦久 西村欽也 井上礼之助
八月 七日 薪能 五時卅分始
能 半蔀 衣斐正宜 西村欽也 佐藤友彦
能 張良 河村鉦二 高安滋郎 佐藤秀雄
狂 盤山伏 井上松次郎 大野弘之 井上礼之助
八月廿八日
能 頼政 喜多長世 高安滋郎 佐藤秀雄
能 葵上 長田曉 西村欽也 井上松次郎
狂 入間川 井上松次郎 大野弘之 井上礼之助
九月十一日 観世会
能 竜田 梅若盛義 高安滋郎 佐藤友彦
能 玄象 大槻秀夫 西村欽也 大野弘之
狂 子盗人 井上松次郎 佐藤秀雄 井上礼之助
九月十五日 鼎雲会
能 井筒 内藤泰二 小沢喜一 竹腰勝一
能 土蜘 松井直子
能 山姥 鬼頭嘉男 風岡勇二 井上松次郎
狂 昆布売 佐藤友彦 大野弘之
九月十七日 九皐会
能 半蔀 野垣慶子 高安滋郎 佐藤友彦
能 安達原 高橋暸一 西村欽也 井上松次郎
狂 お冷し 井上松次郎 井上礼之助

九月十七日 愛知県芸術祭能狂言の会 於豊田市文芸センター六時始
能 土蜘 内藤泰二 高安滋郎 佐藤秀雄
狂 武悪 井上松次郎 野村又三郎 井上礼之助
九月十八日 和泉流狂言大会 午后一時
狂 末広がり 岡崎久太郎 林東助 津田庄三郎
狂 口真似 山本浅太郎 野村又三郎 井上礼之助
狂 二九十八 水谷良夫 山本憲吉
狂 しびり 長谷川通雄 井上祐一
小舞 鵜飼赤塚加代子
狂 舟ふな 荒木和幸 光岡修
狂 蝸牛 原田三男 権田重紘 大原紋三郎
狂 萩大名 徳田文三 野村又三郎 井上礼之助
狂 奉縛 佐野元之助 松井平 中山伸一
狂 盆語 朝比奈直子 今枝靖雄 松井郁雄
狂 杭か人か 堀江四郎 今枝中北宇多子
狂 竹生嶋参り 佐藤融 鷺見政行

九月廿二日 大衆能 於 市民会館中ホール
能 小袖曽我 長田曉 井上松次郎
能 葵上 久田徹二 高安滋郎 野村又三郎
狂 附子 佐藤友彦 大野弘之 井上礼之助
九月廿三日 呉竹会 金森準三師追善会
能 砧 橋岡久馬 高安滋郎 井上松次郎
九月廿五日 幸謡会
能 清経 南方磯貝 幹子勝子 西村欽也 村井邦子 金井久枝 高安滋郎 井上松次郎 井上礼之助
能 熊野
狂 杭か人か

狂言

昭和52年9月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7—5
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481)4745

狂言人語

秋、狂言シーズンもいよ〳〵開幕です。九月十八日は当地方での和泉流狂言愛好者の合同の狂言大会、日頃の会員諸氏の研鑽の成果を発表いたします十月には十六日に「やるまい会」、そして十九、二十日の二日間にわたり、市民芸術劇場，77の一環として、佐藤友彦市芸術奨励賞受賞記念「狂言の夕」が別掲案内のごとく開催されます。どうかご期待下さい。

九月の催能

九月十一日
能 竜田　観世会　梅若　盛義　高安　滋郎
能 玄象　間　大槻　秀夫　西村　欽也　佐藤　友彦
狂 子盗人　井上松次郎　大野　弘之　佐藤　秀雄　井上礼之助

九月十五日
能 井筒　雙雲会　内藤　泰二　高安　滋郎
能 土蜘　小沢　喜一　竹腰　勝一　高安　滋郎
間　松井　直子
能 山姥　鬼頭　嘉男　風岡　勇二　西村　欽也　井上松次郎
狂 昆布売　佐藤　友彦　大野　弘之

九月十七日
能 半蔀　九皐会　野垣　慶子　高安　滋郎
能 安達原　高橋　暸一　西村　欽也
狂 お冷し　井上松次郎　井上礼之助

九月十七日　於豊田市文芸センター六時始
能 土蜘　内藤　泰二　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂 武悪　井上松次郎　野村又三郎　井上礼之助

九月十八日　和泉流狂言大会　午后一時

九月廿二日　大衆能　於　市民会館中ホール
能 小袖曽我　長田　曉　井上松次郎
能 葵上　間　久田　徹二　高安　滋郎　野村又三郎
狂 附子　佐藤　友彦　大野　弘之　井上礼之助

九月廿三日　呉竹会　金森準三師追善会
能 砧　橋岡　久馬　高安　滋郎
間　井上松次郎

九月廿五日　幸謡会
能 清経　南方　幹子　磯貝　勝子　西村　欽也
能 熊野　村井　邦子　金井　久枝　高安　滋郎
狂 杭か人か　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

子盗人＝知人の宅へ盗みに入った男座敷に寝かされた赤児の可愛さに、自分の立場も忘れ、夢中になってあやす内、家人に見つかってしまいます。

昆布売＝自身太刀を持って外出した大名、途中で同道した昆布売を無理矢理太刀を持たせましたがとたんに立場は逆転、自分の太刀で威された大名は昆布を売らされる破目となります…。

お冷し＝清水に遊山に出かけた主従日頃無粋な主人が滝の水を汲むとて「お冷しをむすぶ」と表現したことから口のへらぬ太郎冠者と、水掛論ならぬ「お冷し論争」が始まります。

武悪＝不奉公者の武悪を討って来るよう主命を受けた冠者。同僚のよしみでこれを助け逃がしてやったのですが、討ったという偽の報告を受けた主人が気分晴しに清水へ出掛けた所へ、お礼参りに来た武悪とばったり……。

附子＝出がけに主人が猛毒だからけっして見るなと云いおいた附子（ぶす）怖い物見たさの二人の冠者は遂にふたを開けてしまいます。附子の正体は何んと甘い砂糖でした……。

杭か人か＝一人留守居を云つけられた冠者、おっかなびっくり屋敷の廻りを槍を持て夜廻りに歩きます。植込みの陰に何やら黒い影、おそる〳〵杭か人かと声をかけると「くい」と返事が返って来ました……。

市民芸術劇場，77

佐藤友彦市芸術奨励賞受賞記念

狂言の夕

於・名演小劇場

第一日（十月十九日（水）午后六時半始）
靱猿　佐藤　友彦　佐藤　秀雄
無布施経　野村又三郎　井上礼之助
千鳥　和泉　保之　井上松次郎　鷲見　政行

第二日（十月二十日（木）午后六時半始）
蝸牛　和泉　保之　野村又三郎　井上　祐一
宗論　井上松次郎　大野　弘之　松井　直子
奈須与市語　佐藤　友彦
縄ない　井上礼之助　佐藤　秀雄　野村又三郎

狂言同心

野村広二

今年の夏も能界はにぎやか。まず七月の盛会だった朝日狂言会は、鎌腹で大蔵弥太郎氏が太い線の芸、井礒に和泉保之氏がすっきりとした芸をみせて持ち前のよさを表わす。ともに量感あることは言うまでもない。そして狂言の心と形のすばらしさをつくづくと味わせて佳。また大蔵基嗣・基義両氏の附子はその一挙手一投足に狂言のリズム感をたんのうさせ、名古屋勢（松ほか）の佐渡狐には名古屋特有のやわらかくすなおな味わいがあった。来年の第二十回を今から大いに期待したい。

七月九皐会で三笑（観世武雄ほか）をみる。佳作。現行能で笑いの表現を持つ二曲のうちの一曲。今一つは景清である。これは渋いよさの中に心を広々とさせる。それにじむような能の味がある。もちろん山姥や当麻や大会とはちがった曲趣である。東洋の理想美といった境地にひたらせる不思議さがある。楽屋で喜之氏と「こういった地

味な曲がやっとわかるようになりました」「なるほど」喜之氏は語をついで噛みしめるように「やっている役者にも謡の意味がむつかしいものね」と述べられた。切りの橋掛でシテを真中に三人並んだふんい気の印象は強い。みてよかったと思う。

八月の薪能は今年はじめて二日間の興行。盛況であったことを喜びたい。月末長田驍後援会能が催される。喜多長世氏が頼政を舞って華を添え、その首途(かどで)をはげます。情熱を傾けて演ずる老武者頼政の詩が心をはずませた。秀逸。催しは大岩宏庄氏の能面展(女面、中京画廊)。女面の美しい表情をみつける。金剛家・徳川美術館所蔵面の模写について心ゆかしい苦心談をきく。

放送は、「バローにきく」(天井さじきの人々・繻子の靴・演劇と自然・世阿弥の皮肉骨ほか、三井寺・観世寿夫、鐘の音・野村万作、きき手渡辺守章)お達者ですか・壬生狂言の人々(ゲスト茂山千作夫妻)をみ、幸祥光さんをしのぶ(FM、再放送、いずれもNHK)をきく。本は「失望したルノーとバロー来日公演」(スター・ダスト欄芸術新潮七月号)西欧における日本文化の受容・早稲田小劇場欧州公演に同行して(トロイアの女上演。好意的理解にも古さ、まず能やカブキとの対比やつながりで理解、朝日七・四と五、大岡信)薪能特集(座談会薪能顕現多田侑史・徳江元正ほか、薪能の関係資料・上演記録・暦、観世七・八号、佳物狂(中西進、本・八月号、講談社)窓とおんぼろ楽器(桜間道雄の西行桜・観世左近夫人のことば・青年能楽師の体格と能装束および舞台の広さ、野上弥生子、波・七月号、新潮社)小説を書くのは難しい(豊島弥左衛門のすばらしさ、有吉佐和子、波・八月号、同)特集・日本人が創った「表情」(能面・狂言面ほか、解説・顔と首・秦恒平、芸術新潮九月号)太郎冠者ものがたり(ふじたあさや、中学生のための教養書、NHKブックスジュニアおもしろし)付、九月東京・銀座狂言会で井上松次郎・祐一両氏)祐一氏は松次郎氏長男、在京中)が無布施経(ふせないきょう)を演ずる。いろいろの意味から成功を祈ります。

十月の予告

十月二日　九皐会　素謡会

十月九日　能　菊慈童　今沢美和　高安勝久
　　井筒　久田秀雄　西村欽也
　　間　佐藤友彦
　　能　鉄輪　浦田保利　高安滋郎
　　間　大野弘之
　　狂　飛越　井上礼之助　井上松次郎

十月十日　幽花会
　　能　小袖曽我　村木寛茂
　　東山清和
　　間　茂山あきら

十月十五日　猶恵会　囃子会

十月十六日　やるまい会　午后一時始
　　狂　佐渡狐　茂山千五郎　木村正雄
　　茂山正義
　　井上礼之助
　　狂　棒しばり　野村万作　野村又三郎

十月十九日・廿日　市民芸術劇場
　　狂言の夕(第一日)
　　〃(第二日)
　　狂　川上　野村又三郎　野村万作
　　狂　見物左衛門　野村万之丞　井上松次郎
　　野村万之丞
　　野村又三郎
　　野村万作
　　狂　六地蔵　和泉保之

十月廿二日　修諷会
　　能　蝉丸　須賀黎子
　　須賀実　高安滋郎
　　間　野村又三郎

十月廿三日　淡交会
　　半能　養老　橋岡久共　高安滋郎
　　能　熊野　瀬古　高安滋郎
　　三輪　伊藤長八　高安滋郎
　　間　佐藤秀雄
　　狂　いろは　井上松次郎　井上礼之助

十月廿三日　豊橋市民文化会館
　　狂　鼻取相撲　野村又三郎　佐藤友彦
　　井上松次郎
　　狂　隠し狂言　野村万之丞　野村万作
　　狂　しびり　野村信行　野村又三郎
　　狂　栗焼　井上松次郎　井上礼之助
　　狂　茶壺　野村万作　野村万之丞
　　井上礼之助

十月廿九日　一謡会
　　能　藤戸　梅田とし子　高安滋郎
　　間　井上松次郎

十月卅日　中部金剛会
　　能　猩々　加藤ぬい　高安勝久
　　能　経正　河井隆子　西村欽也
　　能　半蔀　豊島三千春　高安滋郎
　　間　佐藤友彦
　　能　紅葉狩　日比野圭昭　西村欽也
　　間　大野弘之　松井直子
　　狂　盆山　佐藤秀雄　佐藤友彦
　　狂　竹生嶋参　井上松次郎　井上礼之助

皮膚科　泌尿器科
大野皮膚科医院
医学博士　大野弘之　(狂言共同社同人)
名古屋市西区香呑町6—56
ダイヤモンドシティー4階
名西医療センター
電話(052)531—5553
木曜・祭日・土日曜午后・休診

狂言

昭和52年10月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7－5
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社電(481)4745

狂言人語

暖かい秋の日が続き、おまけに降雨ゼロのから〳〵天気。天候は良いのに越したことはありませんが、これだけ上天気が続くと逆に不安になります。ちなみに松茸がこのから〳〵陽気で全くの不作とか。あの独得の秋の風味も今年は顔も拝めぬ秋となりかねません

さて十月、十一月と狂言のシーズンたけなわの感があります。「やるまい会」「狂言の夕（二日間）」「豊橋狂言鑑賞会」と続く十月、そして十一月は恒例の「狂言和泉会」、別掲案内のごとく繰り拡げられます。今回は珍しい「髭櫓（ひげやぐら）」を中心に楽しい曲目を揃えました。どうかご期待ください。

九月の催能

十月二日　九皐会　素謡会
十月九日　青陽会　十時半始
能菊　慈童　今沢　美和　高安　勝久
能井　筒　久田　秀雄　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能鉄　輪　浦田　保利　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂飛　越　井上礼之助　井上松次郎

十月十日　幽　花会
能小袖曽我　寛茂　村木　清和　東山　茂山あきら
間
十月十五日　猶恵会　雛子会
十月十六日　やるまい会　午后一時始
狂佐渡狐　茂山千五郎　木村　正雄　茂山　正義
狂棒しばり　野村　万作　井上礼之助　野村又三郎
狂川上見物左衛門　野村又三郎　野村　万作　野村万之丞
狂六地蔵　和泉　保之　井上松次郎　野村万之丞　野村又三郎　野村　万作
十月十九日・廿日　市民芸術劇場
狂言の夕（第一日）
〃（第二日）
十月廿二日　修羽会
能蝉丸　須賀　黎子　須賀　実　高安　滋郎　野村又三郎
十月廿三日　淡交会
半能養老　橋岡　久共　高安　滋郎
能熊野　瀬古　高安　滋郎
能三輪　伊藤　長八　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂いろは　井上松次郎　井上礼之助
十月廿三日　豊橋市民文化会館
狂鼻取相撲　野村又三郎　佐藤　友彦　井上松次郎
狂隠し狂　野村万之丞　野村　万作
狂しびり　野村　信行　野村又三郎
狂栗　焼　井上松次郎　井上礼之助

狂茶　壺　野村　万作　野村万之丞　井上礼之助
十月廿九日　一　謡会
能藤　戸　梅田とし子　高安　滋郎
間　井上松次郎
十月　卅日　中部金剛会
能猩々　加藤　ぬい　高安　勝久
能経正　河井　隆子　西村　欽也
半　蔀　豊島三千春　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能紅葉狩　日比野圭昭　西村　欽也
間　大野　弘之　松井　直子
狂盆山　佐藤　秀雄　佐藤　友彦
竹生嶋参　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

飛越＝お茶会の宗匠にと頼まれ、壇那に同道されて行く新発意、途中の小川を壇那は苦もなく飛び越えますが、新発意はどうしても越えられません。気の毒がった壇那は、とうとう手をつないで連れ飛びにしますが……。

いろは＝よう〳〵手習いをするまでに成長した子供に、いろはの文字を教えようとまず口写しの稽古を始めます親の言葉をそのまゝ口真似で覚えさせようとするのですが……。

盆山＝近頃世間に流行の盆山を、知人の家へ盗みに入った男、庭で物色する所を家人に見つけられました。家人の方も知人と気付き、盆山の陰にかくれた男を適当にからかって帰そうとします……。

竹生嶋参＝主人に無断で竹生嶋へ出かけた太郎冠者、主人の立腹に逢いやっとゆるされたものの、主人の機嫌を直そうと、他人の咄しを面白おかしくして咄す内、くちなわの秀句につまってしまいます……。

狂言同心

野村　広二

十月半ばおだやかな秋の日が続く。夕方庭の木立ちのなかに立つと静けさが心のすみずみまで行き渡り、しばらく平安を取り戻す。それに今年の十五夜の月はきれいだった。それから二晩三晩はおそく表に出て空を仰ぐ。どちらも狂言や能をみたあとのさわやかな楽しさと通うものがある。

十月はじめ京都へ出かける。室町・金剛能楽堂。名古屋では近か頃みられない老女物の舞台。卒都婆小町・シテ広田泰三氏。春につづく広田後援会二十五周年記念能。兄上の陛一（のりかず）氏は殺生石・女体。一昨年の陛一氏のそれは位、泰三氏は品が目立つ舞台だった。兄はきびしい味、弟はやわらかい味だとも思った。位と品の説明はむつかしいが、能のよさとかこの曲特有のおもしろさとかいぶし銀のはなやかさとか固さとやさしさのほか、そういう大きくて微妙なちがいの卒都婆小町であった。たんのうした。また寄贈を受けた「金剛」第三二巻第三号は百号、その百号を迎えた記念特集が組まれて感慨深い。なおうたい講座（同号）の質疑欄に清音濁音表示（鶴亀のオビタタシ、殺生石のアタ）の一問がのる。そして「オビタタシ、アタなどと、中世の初期頃までは濁んで発音していました（中略）仇はアタンとも読ませ、地方によっては今でも仇をするを、アタンをすると現代用語として慣

用されているほどです云々」と答にあった。私も、小さいとき、祖母や母が「またアタンをしている」と言って、我がままから泣きじゃくる私をたしなめていたことを思い出した。これと通ずるなつかしい言葉が目にとまった。

今年の芸術祭参加では次の二つが目につく。朝長・懐法が観世静夫氏で舞われ、千作氏の枕物狂も出る。別に老女物（六郎氏ほか）や桜間道雄氏の砧も野村万作氏は十月から釣狐を三回（月一回）勤める。名古屋の十月は狂言会が四回（豊橋一回）。うち二回連演の佐藤友彦市奨励賞受賞記念の会が期待され他方やるまい会は第二十回公演のはなばなしさを示す。

さて九月は笛方藤田流金森準三氏の十三回忌追善会（呉竹会）が催され、橋岡久馬氏が砧を手向げる。金森さんの落霜（らいらく）な気性はいつまでも忘れられない。前半は憂愁と期待が詠嘆的なふんい気で進められ、そして卒然と死を迎える間（ま）のよさ。後は痩女に水衣・腰巻姿で現われる。人間の業（ごう）と怒りのなかに夫えの愛もしのばせ、詩的で彫りの深い演じ方に砧のよさを感じさせる。異色の砧であった。和泉流合同狂言大会も盛会だった。

放送は女性手帳・狂言今昔（野村万蔵、五回、NHK、以下おなじ）紅葉狩（大坪十喜雄）鉄輪（金剛巌）美をさぐる・木の工芸・能面（長沢氏春・金春信高）をみ、芸と人・善竹弥五郎（話権藤芳一・茂山千五郎）同・片山博通（権藤芳一・片山博太郎）世阿弥（話小川国夫）をきく。本は、難曲釣狐に連続挑戦・野村万作（朝日演劇欄九・一七）和泉流の伝承に情熱・佐藤友彦（同文化欄・窓、一〇・五）物まね山伏（山田野理夫作）しみず清志絵、お笑い文庫6、太平出版）特集現代演劇（能をみて・観世寿夫、ほかに石沢秀二・中本信幸両氏の文章能と狂言関連、心十月号、平凡社）など。

第十七回
狂言和泉会
昭和三十三年十一月三日午后一時廿分始
熱田神宮能楽殿

番組

雁礫　井上松次郎
磁石　三宅藤九郎
鐘の音　佐藤友彦
宗論　佐藤秀雄　野村又三郎
早舞　藤田六郎兵衛　福井啓次郎　吉田定男　助川竜夫
髭　大野弘之　井上礼之助　三宅右近　鳥越正夫　井上礼之助　井上祐一
櫓　三宅右近　大野弘之　佐藤友彦　歌村鴻助　今枝良治　石田喜樹　今枝政行　鷲見靖雄
和泉保之

地謡　野村又三郎　井上松次郎　井上祐一

名古屋和泉会

十一月の予告

十一月三日　幸友会
能　三輪　坪井香容子　高安滋郎
間　井上松次郎

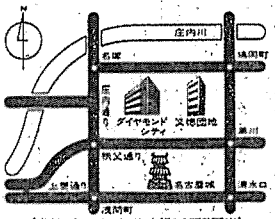
十一月五日　嘉謡会加藤惣兵衛喜寿祝賀
能　羽衣　手島なみ江　西村欽也
十一月六日　風韻会
能　鶴亀　御收紀代　古井佐秀　高田みね子　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　葛城　渡辺節子　西村欽也
間　大野弘之
十一月十二日
狂　萩大名　井上礼之助　佐藤友彦　井上松次郎
能　野宮　梅若盛義後援会　梅若盛義　西村欽也
間　佐藤友彦
能　土蜘蛛　梅若盛義　高安滋郎
間　大野弘之
狂　雁大名　井上礼之助　佐藤秀雄　井上松次郎
十一月十三日　観世会
能　江口　片山博太郎
間　観世寿夫
能　野守
間　観世寿夫
狂　無布施経
十一月十九日　壷泉会
能　東北　近藤幸江　西村欽也
間　野村又三郎
能　小鍛冶　泉嘉夫　高安滋郎
間　佐藤友彦
狂　悪太郎　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
十一月廿日　邦謡会
能　杜若　曽我澄子　西村欽也
能　小督　横井敏子　坂田猛　推葉富美子　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　猩々乱　梅田邦久　高安勝久
狂　魚説法　井上礼之助　井上松次郎
十一月廿三日　和泉会
十一月廿六日　邦謡会　素謡会
十一月廿七日　竹韻会

ゆたかなくらし　楽しいショッピング

木曜定休

500台収容
駐車場完備

新しい生活がある街
ダイヤモンドシティ
名西ショッピングセンター
名古屋市西区栄町6-56　TEL 523-2444



（名鉄バス・市バス庄内通り3丁目下車）